

公益財団法人日本陸上競技連盟

陸上競技研究紀要

Vol.13, 2017

ISSN1349-7596

Bulletin of Studies in Athletics of JAAF

JAAF

Japan Association of
Athletics Federations

contents

特集企画

原著論文

資料報告

日本陸連科学委員会研究報告

日本陸連医事委員会エキサイティングメディカルレポート



写真提供: フォート・キンモト

「陸上競技研究紀要」

(Bulletin of Studies in Athletics of JAAF)

投稿規定

陸上競技研究紀要編集委員会

1. 投稿資格について

特に制限は設けない。

2. 投稿内容および種類について

投稿内容は陸上競技についての理論と実践に関するもので、内容に応じて、総説、原著、資料、指導法および指導記録の報告などに分類される。スタイルは和文、英文のどちらでもよい。

投稿論文には上記の投稿種別を明記し、英文のタイトル、著者、所属、総説および原著には要約（150語以内）をつける。

（注：何らかの理由で英文要約等の作成が困難な場合は、編集委員会にその旨をご相談ください）

3. 採否等について

原稿は査読を行い、査読結果をもとに採否および掲載順序の決定、校正などは編集委員会が行う。

4. 原稿の書き方について

原稿は原則として、ワードプロセッサで作成する。本文は、横42文字×縦38字で1頁とする。（1頁は約1600字、刷り上がり10頁以内、図表もその頁数に含む、すべて白黒にて作成）英文は、A4サイズタイプ用紙を使用し、15枚以内を原則とする。

計量単位は、原則として国際単位系（m, kg, sec など）とする。

また、英文字および数字は半角とする。

5. 文献の書き方について

本文中の文献は、著者（発行年）という形式で表記する。

例）田中（1996）は -----

文献は、原則として、本文最後に著者名のABC順で記載する。書誌データの記載方法は、著者名（発行年）、論文名、誌名、巻（号）、ペー

ジの順とする。

例）吉原 礼，武田 理，小山宏之，阿江通良（2006）女子棒高跳選手の跳躍動作のバイオメカニクス的分析。陸上競技研究紀要，2：58-64。

伊藤 宏（1992）陸上競技の発育・発達。陸上競技指導教本—基礎理論編—。日本陸上競技連盟編，大修館書店，55-72。

同一著者，同発行年の文献を複数引用した場合は発行年の後に a, b, c をつける。

例）田中ら（1996 b）は，-----

6. 原稿の提出先

投稿原稿（本文，図表など）は，下記へ E-mail の添付資料として送付するとともに，プリントしたもの1部を郵送する。

〒163-0717

東京都新宿西新宿 2-7-1

小田急第一生命ビル 17 階

日本陸上競技連盟

「陸上競技研究紀要」編集委員会宛

(Tel 03-5321-6580 Fax 03-5321-6591)

E-mail: kiyou@jaaf.or.jp

7. 原稿の締め切り

原稿の締め切りは特に設けず，随時受理し，査読を行う。ただし，2017年度版は，2018年1月末日とする。

8. その他

本研究紀要に掲載された内容の著作権は公益財団法人日本陸上競技連盟に帰属する。

(2017年12月 改訂)

あ い さ つ

公益財団法人日本陸上競技連盟
専務理事 尾縣 貢

昨シーズンは、陸上競技の走種目の中でも最も短い100mと最も長い男子マラソンで大いなる活況を呈しました。日本人で初めて10秒の壁を破った桐生祥秀氏(東洋大学)の活躍が多く新聞の一面を飾り、10秒突破が国民にとっての強い関心事であったことを改めて感じました。また、長く低迷をつづけていた男子マラソン復活の突破口を開いた設楽悠太氏(ホンダ)の日本記録は、多くの陸上競技関係者、陸上競技ファンが待ち望んだものでした。

この二つの大偉業は、他のアスリートに希望と勇気を与えるものであり、2年後の東京オリンピックにつながるものであると断言できます。いずれの偉業も、アスリート自身とコーチのたゆまぬ努力により達成されたものでありますが、それ以外にも多くのアントラージュによるサポートがあったものと察します。そのうちの有力なものとして、医科学のサポートがあげられます。これぞ、わが国のアドバンテージであり、これまでに積み上げられた研究成果が彼らのトレーニング現場やレースに活かされてきたことでしょう。彼らにとどまらず、2020東京オリンピックへの道を歩んでいるアスリートに対しては、医科学サポートをさらに強化していく必要性を感じています。そして、それらのサポートを通して得られた知見は形として残し、トレーニングや競技の現場に降ろしていくとともに、続く世代へも財産として伝達しなければなりません。

それとともに、2020年東京オリンピック以降の陸上競技界の隆盛につながるような研究活動も決して忘れてはなりません。オリンピックの成功は、メダルや入賞の数だけで評価されるものではなく、「いかに陸上競技が国民に浸透したか」「どれほどの数の子どもたちが陸上競技を志し、そこから次代のエースが育っていったか」という観点からも評価されるべきであると考えます。そこで、陸上競技の普及や若手アスリートの育成に役立つような科学知も研究活動を通して、積み上げていく必要があります。

経験知と科学知を持ち合わせたコーチを目指していただきたいと思います。

本連盟の陸上競技紀要がその一助となれば、幸甚に存じます。

陸上競技研究紀要

Bulletin of Studies in Athletics of JAAF

Vol.13 2017

目 次

【特集企画】

ジュニア競技者育成と相対年齢効果

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

【原著論文】

陸上競技日本代表選手の競技ヒストリー研究

－男子短距離選手を対象にした複線径路・等至性モデル－

・・・・・・・・小林柊次郎ほか・・ 90

桐生祥秀選手が10秒の壁を突破するまでの100mレースパターンの変遷

・・・・・・・・小林海ほか・・ 109

【資料報告】

中学生陸上競技者におけるコントロールテストの評価基準表の作成の試み

・・・・・・・・森健一ほか・・ 118

和歌山インターハイ 走幅跳1位、2位、足達一馬選手、遠藤泰司選手 三年間の軌跡

・・・・・・・・中谷忠嗣・・ 126

全国高等学校陸上競技対校選手権大会出場者の記録と記録達成率についての分析

・・・・・・・・渡部誠ほか・・ 137

【日本陸連科学委員会研究報告 第16巻(2017) 陸上競技の医科学サポート研究 REPORT2017】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 149

【エキサイティング メディカル レポート】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 251